

「原点(ぼちぼち)」は2020年から美術家のコイズミヤカヲラ  
ンクージを「盲目の」彫刻家だと勘違いしたことからはじめた私  
奮のようなフリーペーパーです。vol.0からはじめたので今回の  
vol.5で7目です。これをきっかけに、どなたでも何かやりと  
りが出来たら。

# ぼちぼち

Vol.5

## 「理由(わけ)のわからない話」

ますは、2022/9/23〜10/3 新潟市の風画廊で「かさなりとかたまり」という個展をしました。9/24に画家で長岡造形大学の教授をされている遠藤良太郎さんのトークセッションの際に、話が与太話になっても大丈夫な保険として、お土産代わりに用意したハンドブックの内容を描載します。

トークセッションをお願いして、その会のタイトルをどうしようかとメッセンジャーでやりとりする中で、遠藤先生から、作品を見たり学生の話を聞いていて、特異性と思われる内容が必然性を帯びていることがあって面白いと思っているという話があり、その後「話にならないお話」とか「訳は話せん」というのが飛び出して、私がこれに飛びついて「理由(わけ)のわからない話」というタイトルになった。

イギリス経験論の哲学者ヒューム (1711-1776) が因果関係は必然性が無いと言っている。私たちは理路整然と、○○だから○○、これこれこうだからこうなる、と論理が成り立っているように思い、納得して暮らしているけれど、因果関係にはそもそも客観性もなくて、出来事と出来事がつながって起きることを繰り返すことからくる習慣によって、そう考えるようになっているに過ぎないと言っている。極端なことを言えば、ビリヤードの球が次の瞬間には思ってもよらない方向に飛ぶこともあり得るとまで言われている。私たちは今までがそうだったからこれからそうだと思っているに過ぎないというのはなしであって、私はこれに強み興味を惹かれた。私にとってはまさに「理由(わけ)のわからない話」だと思った。わけわからない極端な話にも思えるかも知れないけれど、

デヴィッド・ヒューム

1711-76 スコットランド生まれ

浮世は全て人の手の中であり、「経験と直観」に基いている (それを超えて本能や理性を見出すこと)

強い力「印象」(印象の強い印象、イメージ) 思考や直観の印象は別に現れる

強い力「印象」(印象の強い印象、イメージ) 思考や直観の印象は別に現れる

強い力「印象」(印象の強い印象、イメージ) 思考や直観の印象は別に現れる

強い力「印象」(印象の強い印象、イメージ) 思考や直観の印象は別に現れる

強い力「印象」(印象の強い印象、イメージ) 思考や直観の印象は別に現れる

強い力「印象」(印象の強い印象、イメージ) 思考や直観の印象は別に現れる

強い力「印象」(印象の強い印象、イメージ) 思考や直観の印象は別に現れる

強い力「印象」(印象の強い印象、イメージ) 思考や直観の印象は別に現れる

強い力「印象」(印象の強い印象、イメージ) 思考や直観の印象は別に現れる

強い力「印象」(印象の強い印象、イメージ) 思考や直観の印象は別に現れる

強い力「印象」(印象の強い印象、イメージ) 思考や直観の印象は別に現れる

強い力「印象」(印象の強い印象、イメージ) 思考や直観の印象は別に現れる

強い力「印象」(印象の強い印象、イメージ) 思考や直観の印象は別に現れる

それよりは、因果関係が開れるのであれば、理由は理由と呼べなくなる。私たちの奇って立つ足元が危うくなる話だけれど、因果関係が緩んだ状態で過ごすというのは、とても豊かな可能性を含んだ面白い話ではないかなと思った。<sup>※1</sup>

経験が個人的なものであれば、習慣も異なっているわけで、その因果関係も独自のものといえる。皆少しづつ違っている、場合によっては極端に違う。習慣が裏付けだと思えば、その論理の正誤も疑わしくなってくる。本を読んでいて、前提に述べられてきたことからこう帰結するだろうと思ったり違ったりする経験はだれでもあるだろう。ずっと前に自分がノートに書き記した思いつきや散文が、あとで読み返してみると論理に飛躍があっって、どうしてそういう風に繋がったのか、自分でも思い出せない時がある。私の話はだいたい飛んで、上手く伝えられないことが多いのもそういうことです、すみません。

赤ちゃんと言葉を習得していくことがいかにミラクルかという話が「ゆる言語学ラジオ」というYouTubeの番組で見ることができる。とても面白いから是非。(赤ちゃんの言語習得が無理ゲーすぎる【赤ちゃんの言語習得】#107 (〜#114)

赤ちゃんは、だんだん目が見えるようになり、音も聞こえるようになってくる中で、最初は世界がめちゃくちゃカオスな状態としてあるわけで、そこから分節化した要素を取り出していくことによって状況を把握していくことになる。私たちが、もしいきなりその認知状況に投げ出されたら、頭が狂ってしまうと思う。例えば音なら、最初はすべてが混ざった状態、ノイズなどの環境音から人の話し声まで全部が混ざった状態で聞こえている。見えるものは図と地の区別も空間的な距離感もまだ掴めずにいると思うと、色は地味だけれどめぐるめくサイケデリック画みたいない状況かも知れない。赤ちゃんが●が2つ並んでいるのを見ると安心するけど、人が目を隠すと泣くというのもそういう事象のひとつなのだろう。生存に必要な保護者としての顔をかオスの中から見つけて安心する作用は機能として強い、優先的なものだと考えられる。

私がよく思い出すのは昔 NHK スペシャルでやっていた「驚異の赤ちゃん」みたいな特集。その中で、8ヶ月までの赤ちゃんが、人間の顔を個人

原点 (ぼちぼち) vol.5  
2023年1月11日発行  
著 / 発行 コイズミヤカ  
coizumi@sf7.so-net.ne.jp

原点 (ぼちぼち) vol.5

原点 (ぼちぼち) vol.5

原点 (ぼちぼち) vol.5

原点 (ぼちぼち) vol.5

原点 (ぼちぼち) vol.5

原点 (ぼちぼち) vol.5

原点 (ぼちぼち) vol.5

原点 (ぼちぼち) vol.5

原点 (ぼちぼち) vol.5

原点 (ぼちぼち) vol.5

原点 (ぼちぼち) vol.5

原点 (ぼちぼち) vol.5

原点 (ぼちぼち) vol.5

として見分けられると同じように、チンパンジーの顔も見分けられる、いうのをやっていて本当に驚いた。その後その能力は不要になるので淘汰される。チンパンジーの個体差を知る必要が人間にはないから、その高い解像度は後に失われていくという話だと思う。必要なものしか見えない見えない。見ることをコスパよくしていく機能があるということ。

この話がどうつながるかという、カオスな環境の中から図像や言葉を分節化された要素として取り出して、い過程自体がそもそも経験であって、その時にすでに因果関係の形成もおこなわれていると思うという話がしたい。赤ん坊が8ヶ月を過ぎてチンパンジーの顔を見分けられなくなるのは、その能力というか、自分の生存に不要なもので高解像度で入力していると、脳の情報処理能力が追いつかない (赤ちゃんがよく寝るのもそのため) ので、不要なものは低解像度 (チンパンジーは全部チンパンジー) で受け取るようになる。状況の認知及び言葉の習得と引き換えにそれが高くなることは、それぞれの印象の取得だけでなく、関わりやつながりが発生しているだろう。(哲学者カントが考えた「世界に接するためのフリンターとしての眼鏡」自体が、赤ちゃんの時から赤ちゃんと一緒に育ってゆくのだろう。)

話をないでみて、ここに飛躍があるかも知れけれど、赤ちゃんの見聞している環境のカオスと思うと、ヒュームが言うあり得ない現象、つまりこのあと、誰も経験していない未来に、ビリヤードの球が有り得ない方向に飛ぶかも知れないという話を真に受けることも可能なのでは無いかと思えてくる。それは経験も物理法則もまだ無い (見られても見出されていない) 段階だからだ。物理法則は安定していると考えれば常識的な範囲の話に落ち着くけれど、これまでのようにはならないかも知れないと「言う (考える、思う)」ことは可能なのである。カオスで未分化な芋ずる式の状況の中から、物事を分節化して分類してつなぎ合わせて整理する。その機能によって世界が組み立てられていく。今現前している世界はその機能 (フリンケーション) によって生成されたものだと考えるかも知れない。

私や制作に引き戻して言いたいことは、まず、見えていると思っている世界の私の認識は大きな勘違いかも知れないという気持ちで根本にあって、それが制作の動機になっている。そのあたりのことに注意深くなれば、ちゃんと見ることも容易ではないということがわかるし、生まれた時からあると思っている社会システムがある程度しか合理的でないこともよくわかる。私自身は社会システムよりもっと大きな世界のシステム自体が現状とは限らないとさえ思っている。

制作について、後になってこれをつくった理由がわかるというのが良くなる。自分の前の制作と今の制作が思いがけない仕方につながったりする。これも勘違いかも知れないし、必然的 (と呼べるよう) なものの因果関係を経験によって見つけられたということかも知れない。理由律 (または目的律) があやしくなってくると、リニア (直線的) な時間は参照項程度の扱いになってくる (=真の意味でのリアルなものではなくなってくる)。例えばコンセプトをたてて、それに整合性を保つように作品が作られると考えることは愚かなことだ。コンセプトをたてて作ら始めることは問題はなく、ここで作品とコンセプトの間には応酬があり、ともに可塑性を持っているということ。コンセプトと作品、または言葉と作品の関係、さらには作品と作品の関係というのは、直線的 (時系列) だったり、説明的なものではないということが理解できる。

本の序章が、だいたい本文を書いた最後に書かれるという話を遠藤先生が好きな哲学者の佐々木中が、まさに著書の序章に書いていて、展示のチラシも序章だとも思う。

もう一回自作に戻して、私には自分の足元が危うい、準備もまだ出来ていないのに急に宙に投げ出されたような感覚があっって、制作によって事物を確認しながら作ることが、私自身を世界にすぎ止めることだと思っている。なので、

事物と応答しながらはじめてから世界をつくりなおすイメージがある。はじめは世界を俯瞰するような視点で制作していたところがあったけれど、次第にボトムアップに下から積み上げ支えるような感覚にリリチを感じようようになった。<sup>※2</sup>自分の足元をつくっているのかも知れない。このあたりのことが、ヒュームを魅力的に感じた私の理由。ヒュームよりもっと私に関わりのある哲学思想がありそうだけれど、彼が最初にこの絶対的な世界に縋りをもたらした人だと思う。

今回の展示のチラシに「ルールや記譜、時空間を内包する塊です。」と書いた。ちよっと勇気を出して書いた。それらは世界をはじめてからつくるのに必要な要素だと考えている。

「ルールや記譜」は何かを作ることを促す仕組みだ。それは結果と密着しているものから、もっと距離のあるものもある。私の《重なる箱》は、順番に重なるように次のかたたちが前のかたちを具体的に写しとって、受け入れるように作られていくことが重ねられていく。前のかたたちが次のかたちの記譜になっている。

おりがみを開いた時の折り筋は、まさに記譜そのものだと思った。折られたかたちには、折った過去の時間と、開かれる未来の時間がリニアでないかたちで含まれている。(重なる箱にもリ)

哲学者や哲学史については、まだ初学者で詳しくないのでもう少し勉強したいと思っている。面白いなと思っているところ。

赤ちゃんが世界から出来事を整理して受け取れるようになっていくことは、何かを見えなく聞こえないことによって、何かが見えて聞こえるようになるということだった。私たちも見えている聞こえている状況は、見ること聞こえることそれぞれを受け取りに行っているんだと思う。勉強して何か自分が内面化できた内容が受容の新しい機能となって、過去に読んだ本の意味を変容させたりするのはそういうことかと改めて思う。別にやっつきになって勉強しなくても、日々の経験からそういう世界の変容はそこかしこで起きているのだろうなと思う。

緩くまとめすぎた。もっと今までは全く異なる出来事に直面するかもと、スリッパに行こう。

2022/9/24

コイズミヤ

※1 私のヒュームについての知識は古代ギリシアからはじまる「よくわかる哲学・思想」納富信留 / 楠垣立哉 / 柏端達也 編著 (ミネルヴァ書房 2019) のヒュームの箇所 p.48-49 (今村健一郎) の見聞きページ。『小さな哲学史』ララン著 橋本由美子訳 (みすず書房 2008) のヒュームの箇所 (ラランという人のこの本が、ひたすら含みや匂わせて書かれている文章で出ていてこんなアリのなか！ととても面白い。) 丁度その頃企画した「点

点の会②」の読書会 (2022/4/29) で読んだ岡崎悦二郎さんの「抽象の力」(重訂書房 2018) の補論「先行する F」にはヒュームの名前が出てくる。このハンドブック書いた後に、カンタム・メヤースの『有限性の後で』(千葉雅也、大崎完太郎、星野大 訳 人文書院 2016) 第4章「ヒュームの問題」。「なぜこれまでからこれらがわかるのか デヴィッド・ヒュームと哲学する」成田正人著 (骨王社 2022) を読んだ。メヤースの本が難しだけでなく、ちょっと息苦しかったせいか、成田さんの本は楽しい。

※2 この内容についてトークでは詳しく話した。箱の中に世界を作るというのは、俯瞰的視点で世界を最初から作り直すということで、偉くなったつもりはないけれど、創造主、神と同じような面があったかと思う。 (注して間違えないという意味で神で、間違えてはいけないという意味では仮説) 箱を具体的に作る制作をつづける中で、板の厚みととにかく翻弄される。外側と内側を隔てる観念的に思っていたものには、まずは厚みがある。箱の仕組みは板厚によって規定されている。また、トポロジー的に考えてみたら、箱は内も外もなぐつだの塊だった、その塊は板の厚みである。次第に「板厚こそが神様だ」という結論に達した。神がともたけで乾いたものになった瞬間だった。空の上から下に降りてきた。私の中で因果関係が大きく転換した出来事の一つだった。ここでの「板厚」はすっぽろが見過ごしてきた物体だった。実体であるにも関わらず、瞬間的腸胃的なもので本質的なものではないと考えていた。そうではないと確信を持つようになった上でもさらに、中心のものではないもの、仕組みや機能を司るこれはその働きを自ら隠そう、隠れようとするので、そのもの自体を作っているのに、私は何を提出しているのかもわからなくなるのが少なくない。



2022年5月、東京のギャラリー樺GT2での個展「うつしかえと結び目はなし」に展示していたドローイングに数字を振ってあるものが1つ。ドローイングをしている途中で、その結び目の名前が自分でも怪しくなってきた確認するためにDT notationという記法を用いてみたもので、数物に関して色々教えて頂いている田中恵理子さんに、インディアナ大学の結び目についてのサイト「knotinfo」を教えてもらって、検索して調べた。

<https://knotinfo.math.indiana.edu>



## DT notation (Dowker-Thistlethwaite notation) について

そのサイトの記述を参考に説明してみる。

DT notation は数学の結び目理論の記法の1つ。絡まった紐（輪として閉じている）の構造を紐の交差する地点の様子を順に拾っていくことで簡潔かつ有用に（他の人がそのダイアグラムを再構築できるように）記述するための方法。記法の手順は、紐上の交点ではない任意の点 P をスタート地点として選び、そこから紐を辿っていき、交点に到達したら順にナンバリングする。最初の交点に1、次の交点に2。すでに数字が振られている交点に出くわしたら、2つ目の数字を振る。交点は2本の紐の交わる地点なので、最終的には全ての交点に2つの数字が振られることになる。各交点は偶数と奇数の数字が振られていることがわかる。ここから、奇数を 1、3、5... と順に紙に並べて書いて、それに対応する偶数の数字を記録していく。奇数で交点を通ったときに、もしもう1本の紐の下をくぐった場合、対応する偶数の数字に負の符号（-）を付けて記録する。私のスケッチの場合、奇数 1、3、5、7、9、11、13、15、17、19、21、23、25、27 に対応しているもう1つの数字は

22、20、26、2、18、16、10、28、12、24、6、8、4、14

そのうち、奇数回に下をくぐった交点に負の符号をつけると

22、-20、-26、-2、-18、16、10、28、12、-24、6、-8、-4、14

となる。因みにこの紐の結び目はこれ以上解けない状態にはなっていない。これを Knot Finder のサイト「knotfinder」に入力すると

<https://knotinfo.math.indiana.edu/homelinks/knotfinder.php>

ミニマムな（これ以上ほど解けない状態の）DT code 4 8 12 2 -18 -20 6 -10 -22 -14 -16 と結び目の一般的な名前、11n\_42 を教えてくれる。最初の長い code と、ミニマムな code は構造的に同じもの。

このサイトを見ていると、記法がいくつかあること、名前がいくつかあることで物事に隠れた構造があるということとは別に、構造についてのみのやりとりがあることがわかって面白いと思う。隠れるみたいに裏や奥にあるのではなくて、別の目的の為にまたはより良い方法の為に、横に滑らせるような感じかな？

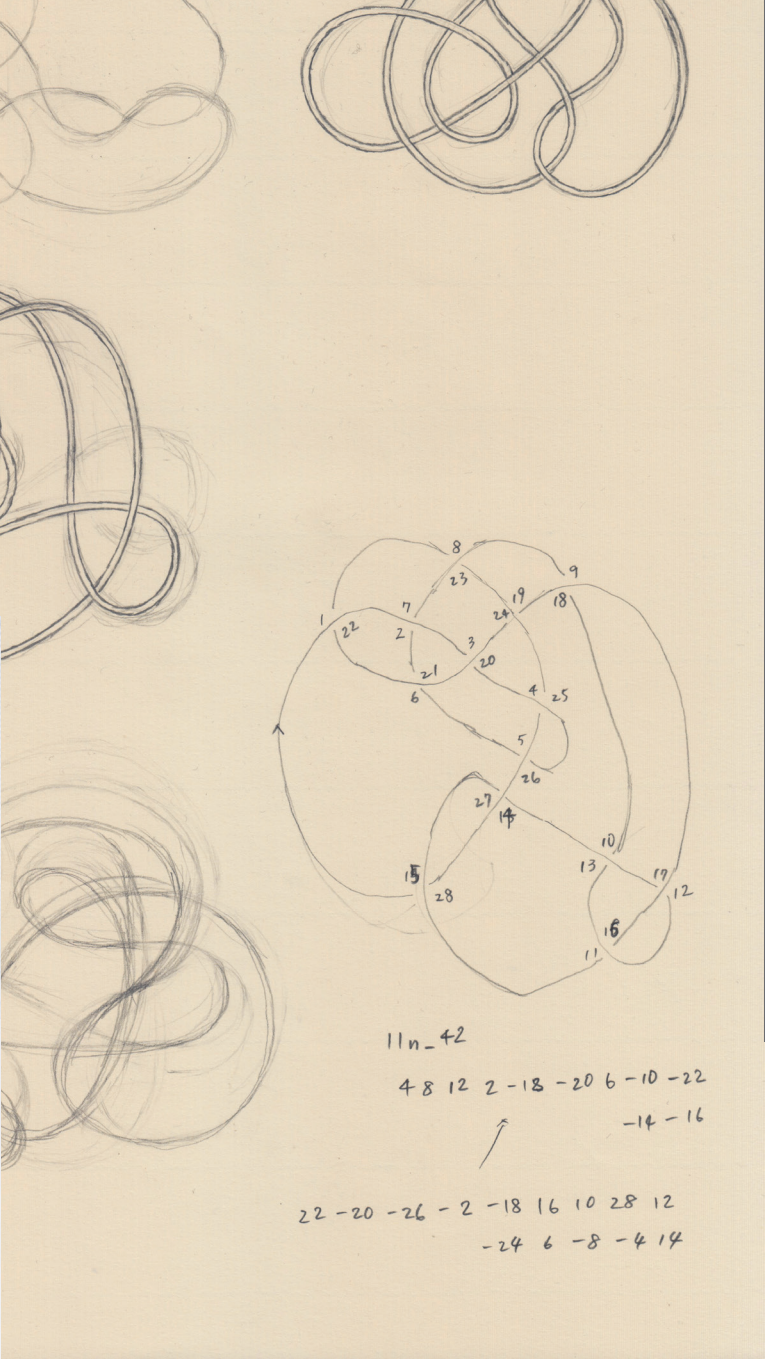
このサイトを見ていると、記法がいくつかあること、名前がいくつかあることで物事に隠れた構造があるということとは別に、構造についてのみのやりとりがあることがわかって面白いと思う。隠れるみたいに裏や奥にあるのではなくて、別の目的の為にまたはより良い方法の為に、横に滑らせるような感じかな？

## あとがき

私がブランクーシを盲目と勘違いしたことについて今考えると、彫刻が視覚によってだけつくられているわけではないということだったのだろうと思う。美術の制作者の英語での一般的なプロフィールがヴィジュアル・アーティストだと知った時、強烈な違和感を覚えた。けれども、見えない部分に何かをつくったら、そこにも「在る」ということよりも、見えないように「隠した」ということの方が有意性を強く持ってしまうジレンマを容易に想像できる。

ブランクーシが自分にしか自分の作品を撮影することはできないとこだわったことと、（私がだけれども）盲目に勘違いするくらい視点や視線に強い焦点的意志を感じないその姿勢が、矛盾せずに彼の写真では実現されているように思う。作品が美術館で台座（と見做される）ものの上に乗る状態と、既成の家具が1つもないというアトリエ空間の中で、他のものたちとともに在る状況に成っている状態を「見る」ことの違いが、作品と空間といった対象と背景、図と地の状況よりもうちょっと以前の自然状態（混じり合っている）を見ているように考えてみたりした。光や写真の粒子が充満してかたちをつくっているとも今も感じる。

私の興味はだいたい「言葉」に傾いてきている。その理由は、「見ること」が受け取り方に規定されていて、知覚や認識はかなり言葉に支配されているように思うから。大人の目になっている今、世界を観察するとき、あらためてもう一度、子どもや自然（未然？）状態をやりなおせるかもしれないかとも思っているが過している。



## 詩が先だったはなし

寺田寅彦の「言語と道具」（岩波少年文庫の「科学と科学者のはなし 寺田寅彦エッセイ集」（池内了 編 2000）に入っている。検索すると青空文庫で読める）のなかに、自然界の中からあらゆるものが選び出され、抽出されて「類概念」が構成されたのが「言葉」の成立ではないかと、「石」をモチーフに書かれていて、私はそのイメージがとても好きでよく一緒に過ごしている。他の本で、ルソーの『言語起源論』には、言語は譬（たとえ）からはじまったとしていると引用されているのを読んだ（最近のことでメモしたのにどの本が失念してしまった）。メルロー＝ポンティの見解も日常語より詩的な語が先行していたと教えてくれた人がいた。

言葉の発生にものごを「見る」ことをはじめとする「感受すること」が関わっているのは間違いないだろう。詩や芸術(になるもの)が世界に広がっていて、そこからまとまりができて塊（石）のように共通の言葉が生まれ、日常的に用を足すために使われるようになり、社会が形成されたようなイメージを図（右下）にしてみた。社会が薄く、詩や芸術が広いイメージ。言葉やそれによって構築されたものは透けた構造体で、その間を容易には掴みがたく詩や芸術が充満している。

平倉圭さんの『かたちは思考する』（東京大学出版会 2019）の序章にペイトソンの「草の三段論法」（述語の同一性に基づいて異なる対象を同一視するという思考の原理）が載っていて、「詩、芸術、ユーモア、宗教は「草の三段論法びいき」であり」、それが「前言語的」だということを重要視するとある。この本を読んでいると、草の三段論法がはじめは未開の地の遠い人の言葉に感じられたのだけれど、段々とリアリティを増してくる。なぜかと言われたら答えられないけれど、そう言うことが可能なのだから、それに寄り添ってみると、それは本当になってくる。✂

## Lenka Clayton の視覚障害者による、視覚障害者のための彫刻

私がブランクーシを盲目の彫刻家と勘違いしたことより後に、《盲人のための彫刻》（1920 年）という作品があることを知った。フィラデルフィア美術館で常設展示されているらしい。

Lenka Clayton（ピッツバーグを拠点とするイギリス系アメリカ人のコンセプチュアルアーティスト）はそれがガラスケースの中にあることの不条理（盲人のためではなくて目の見える人のための展示になっている）に端を発したプロジェクト「Sculpture for the Blind, by the Blind」を展開したとのこと。

彼女はフィラデルフィア美術館へいくつかの申し出を行ったけれど阻まれ、代わりに一般の利用手段を使って作品を見て研究し、解説を書き、フィラデルフィアの視覚障害者を招いて説明を聞いてもらい、言葉から解釈した自分だけの「盲人のための彫刻」を作ってもらったという。（2017 / The Fabric Workshop and Museum との共同制作）その制作の様子の写真や、読み上げられた説明文の内容も掲載されています。↓「Sculpture for the Blind, by the Blind」  
<http://www.lenkaclayton.com/sculpture-for-the-blind-by-the-blind>



Sculpture for the Blind (Beginning of the World) Constantin Brâncuși 1916 marble Philadelphia Museum of Art, Philadelphia, PA, US / WikiArtのPublic domainのページから

左《輪の彫刻\_結び目(11n\_42)》2020 様  
中《結び目のドローイング(11n\_42ii)》2020

余談をひとつ。キットカットのいちご味の最後の一個を後で食べたくて、冷凍庫に隠しておいたら、家人に食べられてしまった。次を買ってきてもらった袋を丸々別のところへ隠しておいた。夜のおやつときに「キットカットないの?」と家人が問うので、「ない」と言ったら「なんで嘘つくの?」と笑われたのだけれど、その時、私には「ある」ことを知っているから私には「ある」だけれど（私の所有だという意味ではない）、彼には見つけれないことを私は知っているので、彼にとっては「ない」ことを私が知っているから、「ない」と答えても嘘にならないと妙に私は納得してしまっていて、（例をあげれば、私は近所のドラッグストアにキットカットが「ある」ことを知っているけれど、食卓で有無を問われれば「ない」と答えるのが普通）この会話が感覚が変更されているのは何なのかな?と不思議になった。（結構本気で理由は夜だったせいかもしれない。）屁理屈に思えるかもだけれど、言葉尻の話ではなくて（屁とか尻とか可笑しいな）、感覚的に腑に落ちるかどうか。前提を変えると言葉の使用も変わるということ。

岡崎乾二郎さんの『抽象の力』の「先行する F」の注に、ガートルード・スタインのことが書かれていて（ヒルマ・アフ・クリントのこともそうだったけど、小さな文字の注のところにも大切なことが!）、気になって彼女の書いたものを読んでみたりしているうちに、言葉の仕組みも動くようになりそうだ。危険だ! ※アメリカの詩のサイト「poets.org」  
<https://poets.org/poet/gertrude-stein>

